

ユキヤナギのエテホン剤処理による 12月出荷の商品率向上

福島県農業総合センター 作物園芸部花き科

部門名 花き—その他の花木—生育調節
担当者 鈴木詩帆里・矢吹隆夫・鈴木安和

I 新技術の解説

1 要旨

ユキヤナギの12月年内出荷は大きな需要があるが、落葉・開花が思うように進まず商品率が低いことが課題である。そのため、エテホン剤処理を行うことにより落葉・開花が促進され、12月年内出荷の商品率を向上させることが可能となる。

- (1) 落葉促進は12月出荷促成作型における11月下旬のエテホン剤処理で効果が高い(表1、写真1)。
- (2) 開花促進(枝先端部の有効花蕾率の向上)およびA品率の向上は12月出荷促成作型における11月下旬処理で効果が高く、1月出荷促成作型における12月中旬処理まで効果が見られる傾向がある。その後は低温遭遇量が多くなることから処理効果は小さくなる(表1、写真2)。

2 期待される効果

- (1) 12月年内出荷における商品率が向上することで所得の増加が期待できる。

3 適用範囲

中通り地域におけるユキヤナギの株入れ促成栽培者


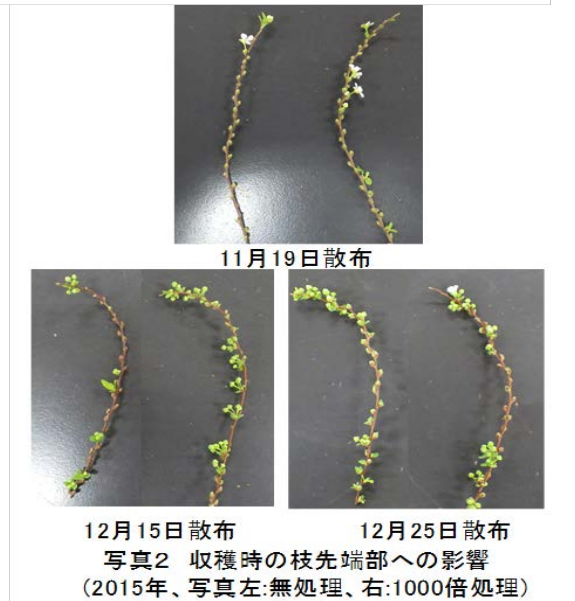
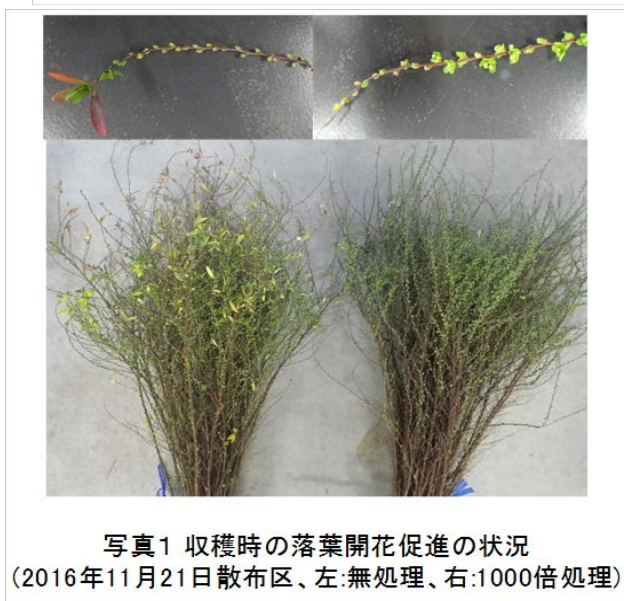
4 普及上の留意点

- (1) エテホン剤(エスレル10)は促成開始10日前に散布し約15日間の促成を行う。処理する際は登録内容を遵守して散布する。
- (2) 10a当たりの資材費は、600株定植した場合18,000円程度である。12月出荷作型において、エテホン剤散布によりA品率が30%増加した場合、10a当たりの販売額は88,000円程度の増加が見込まれる。(M規格のA品とB品のH28年度現地実績価格差14円、収穫本数は35本/株として計算)
- (3) 低温遭遇量以外の耕種的な要因や栽培年の気象条件も、エテホン剤処理効果や落葉率、有効花蕾率、A品率に影響を及ぼす可能性がある。

II 具体的データ等

収穫日	散布濃度	落葉率 (%)	枝先端部の有効花蕾率 (%)	A品率 (%)	低温遭遇量 (時間)	散布処理日
2015年12月15日	1000倍	96 (128)	18 (300)	83	43	2015年11月19日
	無処理	75	6	10		
2016年1月8日	1000倍	99 (99)	48 (141)	86	258	2015年12月15日
	無処理	100	34	57		
2016年1月20日	1000倍	99 (100)	50 (135)	100	384	2015年12月25日
	無処理	99	37	100		
2016年12月16日	1000倍	97 (121)	39 (780)	39	156	2016年11月21日
	無処理	80	5	3		
2017年1月10日	1000倍	99 (103)	44 (259)	48	462	2016年12月16日
	無処理	96	17	26		
2017年1月20日	1000倍	99 (100)	53 (90)	91	596	2016年12月26日
	無処理	99	59	93		
2017年2月4日	1000倍	99 (101)	91 (98)	98	872	2017年1月10日
	無処理	98	93	98		

落葉率、枝先端部の有効花蕾率の括弧内の数値は無処理区を対照(100)とした相対比率
 低温遭遇量: 10月1日から散布時までの5℃以下の低温遭遇時間積算値(アメダス郡山)
 枝先端部の有効花蕾率: 枝先端10cmの右図の3~5の状態の蕾数の割合
 A品率: 70cm以上の切り枝のうち全体の有効花蕾率が概ね30%以上かつ蕾すべてのステージが右図の1から5に概ね80%以上達している枝の割合

III その他

1 執筆者

鈴木詩帆里

2 成果を得た課題名

- (1) 研究期間 平成27年度~28年度
- (2) 研究課題名 地域の特色ある花き品目の安定生産技術の確立(ユキヤナギの落葉開花促進技術の確立)

3 主な参考文献・資料

- (1) 鈴木安和、宗方宏之. 2010. ユキヤナギの株入れ促成における落葉・開花促進技術. 東北農業研究
- (2) 鈴木安和、大河内栄、鈴木宏和. 2012. ユキヤナギの株入れ促成における低温遭遇およびエテホン剤処理による落葉・開花促進技術. 東北農業研究65:181-182